

【翻案】ほんあん--文学作品で、原作の筋、内容を別の作品に書き改めることで、英語のadaptationのこと。『竹取物語』や『源氏物語』などにインド・中国に由来する物語もあるが、西洋からはホメロスの『ユリシーズ』が『百合若大臣』（作者不詳）として初めて室町時代に翻案されたという。明治以後、とくに西洋の作品を日本風に改作することが盛んになった。社会、事件、人物などを日本化するが、固有名詞を日本語に改めるだけでは翻案でない。原作のおもかげをとどめながらも、異相を呈し、別の作品としての生命力をもつ作品の場合すでに翻案の域を越えているが、原作の筋と仕組みをそのまま移し変えたにすぎないような作品は剽窃である。翻案とはその中間に位置する作品である。翻案の場合、ときには原作の精神や主要な部分が欠落したり変容したりすることも少なくない。明治初期には政治小説の類に翻案が多かったが、尾崎紅葉はとくに優れた翻案作品を残した作家である。紅葉の『夏小袖』（1892）はモリエールの『守銭奴』の翻案であるが、日本化の過程で原作の喜劇性は薄れ、会話の滑稽味が強調されて江戸風の茶番狂言の趣が濃くなっている。原作の人物の性格描写や風刺・批判精神が取り上げられず、紅葉その人の創作を思わせる作品となっているのである。これは『隣の女』（1893）でも同様で、原拠のゾラの小説『一夜の恋ゆえに』の自然主義小説特有の暗黒面は省かれて、紅葉一流の市井の日常生活的な風俗描写になっている。作者のなかには翻案であることを隠さない者もいた。その一人、福地桜痴は『あはれ浮世』で、これがユゴーの『レ・ミゼラブル』の翻案であることを明記した。大衆文学では翻案作品はきわめて多く、岡本綺堂の『半七捕物帳』はコナン・ドイルの『シャーロック・ホームズ』に着想を得ていることは有名である。"翻案", 日本大百科全書 (ニッポニカ), JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>

2019年度第3回企画展示

翻案小説 の世界

市ヶ谷図書館 正面ロビー展示ケースにて

2019年9月上旬～12月下旬



第1回
第2回

「翻案文学生まれる」 9月上旬～10月下旬
「創作として羽ばたく」 11月上旬～12月下旬